

童話・紙芝居作家 川崎大治の農繁期託児所論

— 日中戦争・太平洋戦争下の3冊の著書を中心に —

Daiji Kawasaki's Thought and Practice on Seasonal Nurseries: 1936-1943

浅野俊和*
Toshikazu ASANO

本稿は、童話・紙芝居作家の川崎大治が戦時下に著した3冊の農繁期託児所論を取りあげ、川崎が保育運動へと関わりながら、農村の保育に対して何を主張し、どういった実践指導をしていたのかを示すものである。彼の保育観・保育思想に見られる歴史的特質としては、(1) 農繁期託児所という保育の現場において子どもの感情をつかみ、その現実生活に根ざしつつ、自らが創作する童話・紙芝居などの児童文化財や子ども自身の文化活動である遊びの質的向上を図ることで、そこに農村の文化的基盤を築いていこうとした点、(2) 子どもたちによる「集団生活」を農繁期託児所での保育・教育の基本とすることで、そこに農村の合理化や生活の共同化へと発展していく運動的な契機を見出していた点、(3) 社会改善を進めるため、「増産」や「児童愛護」などを積極的に謳い、いわゆる「生産力理論」としての立場から託児所の意義を主張していった点が指摘できる。

キーワード：保育問題研究会、生活の共同化、生産力理論

はじめに

戦中・戦後に童話・紙芝居作家として活躍した川崎大治(1902(明治35)年～1980(昭和55)年)は、楨本楠郎と共編したプロレタリア童謡集『小さい同志』(自由社、1931年)、第1童話集『ピリピリ電車』(子供研究社、1937年)、第2童話集『太陽をかこむ子供たち』(文昭社、1940年)、宇田川種治の画を得た紙芝居『太郎熊次郎熊』(日本教育紙芝居協会、1942年)などを著したことで、児童文学史に名を残している¹⁾。しかし、そうした川崎が、日中戦争・太平洋戦争下において、「保育所の研究は、私の童話創作と共に、私の一生の仕事である」と述べ²⁾、「保育問題研究会」(以下、「保問研」と略記する)への参加などを通して、農繁期託児所の実践に対する指導や研究を行っていたことはあまり知られていない³⁾。

農繁期託児所とは、田植えや稲刈りなどの農繁期に子どもの世話ができない農家の事情を鑑み、放置されがちになる乳幼児の保護を目的として行われた事業である⁴⁾。1890(明治23)年頃に箕雄平の手で開設されたものが嚆矢だとされる農繁期託児所は、1930年代後半から1940年代前半にかけ、農村における労働力不足への対応や食糧増産を企図して、国及び各道府県が設置を奨励・助成したことから、開設数を飛躍的に増大させていく⁵⁾。

また、農繁期託児所に対しては、国・地方行政当局だけでなく、「愛国婦人会」や「中央社会事業協会」、「帝國農会」などの各種団体も早くから関心を寄せており、

農村恐慌によって窮乏化が進んだ1930年代初頭以降、そのあり方を問い、設置・運営の改善を求める論調も少しずつ出はじめてくる。1936(昭和11)年10月に発足し、保育問題の科学的研究をめざしていた「保問研」も、そうした問題に関心を寄せた団体の1つである。

川崎大治は、「保問研」による保育運動へと関わりながら、農繁期託児所に関する論稿を数多く執筆し、それらをもとにして、『季節保育所の経営及び其の実際』(産業組合中央会、1940年)や『村の保育所』(東京講演会出版部、1942年)、『戦時保育所——保姆と挺身隊への手引』(学習社、1945年)という3冊の農繁期託児所論も相次いで著した。川崎は、それら3冊の著作を通して、何を農村の保育に対して主張し、どういった実践の指導をしたのか。本稿では、そうした視点から、川崎による農繁期託児所の実践・研究を取りあげ、戦時下における彼の保育観・保育思想を示してみたい。

I. 童話・紙芝居作家としての川崎大治

1902年4月、北海道札幌市の海産問屋に生まれた川崎大治(本名・池田政一)は、少年時代に巖谷小波の作品と出会ったことから、一生を児童文学へ捧げると心に決め、中学を卒業した1919(大正8)年に弟子入りしようとして上京する⁶⁾。1921(大正10)年、早稲田第二高等学院に入学し、2年後の1923(大正12)年には早稲田大学文学部へと進学した。実家の破産で生活苦となったものの、1926(大正15)年に大学は何とか卒業する。

*子ども学部子ども学科

生活苦にあった1928(昭和3)年、川崎は、全日本無産者芸術連盟(通称・ナップ)が創刊した機関誌『戦旗』に心を惹かれ、プロレタリア児童文学発展のために結成されたばかりの新興童話作家連盟へと加入した。その後、同連盟の解散に伴い、1930(昭和5)年には、ナップが改組した日本プロレタリア作家同盟に加入して、榎本楠郎・本庄陸男・秋田雨雀らとともに『少年戦旗』の編集へと携わる。また、新興教育研究所の設立にも参加し、童謡の発表を中心として、プロレタリア児童文学運動が発展する一翼を担った。その成果が榎本楠郎と共編した『小さい同志』(前掲)であり、川崎は、自作「橋のらくがき」や「鯉のぼり」、「おいらの腕」、「汽車ポッポ」、「メーデー万歳」などの童謡を取めている。

1932(昭和7)年、日本労農救済会本部に入って、児童部の担当となり、無産者託児所や児童救済、子ども会の活動にも携わりはじめた。特に、亀戸無産者託児所における活動の経験は、後に短編創作「靴下」(『お話の木』子供研究社、第1巻第4号、1937年8月、後に「赤い靴下」と改題し、川崎『太陽をかこむ子供たち』(前掲)に収録された)の題材へと生かされている。

しかし、翌1933(昭和8)年、作家同盟との関わりで検挙されししまう。釈放された彼は、1935(昭和10)年に童話作家協会会員となり、童謡から童話へと創作分野を変える一方、児童文学に関する評論なども相次いで発表していった。それらの活動の中から生まれた成果が、第1童話集『ピリピリ電車』(前掲)や第2童話集『太陽をかこむ子供たち』(前掲)であった。

また、1936(昭和11)年10月に結成された「保育問題研究会」へと参加し、菅忠道や松葉重庸らとともに、言語に関わる研究をした第五部会、作業・遊戯の研究を担う第六部会の活動に関与したことから、その後は紙芝居や絵本の創作にも入っていく⁷⁾。童話・絵本の創作活動は終戦を挟んで1950年代半ばまで続けられ、1963(昭和38)年の東京家政大学教授就任以降は次第に民話の再話へと分野が移っていった。また、紙芝居についても、川崎が没する1980年まで創作が続けられ、とりわけ戦後に数多くの作品を残している⁸⁾。

II. 川崎大治と農繁期託児所

川崎大治が農繁期託児所の実践・研究に深く関わっていたのは、「保育問題研究会」が結成された1936年から1945(昭和20)年までの約10年間という時期である。1932年に無産者託児所運動へと関わって以降の彼は、「児童文学運動において政治性を前面に出しての東京での活動が困難になったこと、他方では単に一地方での運動であったのが全国的に運動が高まったこと、これらの二面が主因となって、地方での社会運動支援が積極的」に関わるべきものとなっていた⁹⁾。しかも、農繁期託児所の実践に惹かれた内面的要因として、「複雑な要因が

からんでいただろうが、川崎の子どもずき、それに実践活動に対する情熱がその主たるものだと思う」と、向川幹雄が指摘する点は重要であろう¹⁰⁾。川崎自身の言葉によれば、「村の保育所に参加して、その仕事にいきよかの力をそへるやうになつたのも、その動機はといへば、保育所に取材した長編童話を書くため」であり、「童話文学の創作を、国民としての揺ぎのない実践の中からやつていきたいと願ふ私が、農繁保育所へ出かけずに居られなかつたのも、……保育所の健康な姿がいろいろと目に映つてしきりに私を呼び求めたからであつた」という¹¹⁾。

川崎が農繁期託児所の実践に関わったのは、1936年6月10日から19日までの10日間、秋田県平鹿郡旭村塚堀の農繁期託児所「子供の家」においてのことが最初であった。彼は、その詳細な参加記録「農繁期託児所の十日間——童話作家による幼児生活の観察記録」を『生活学校』誌に発表しており、後には「塚堀保育所の十日間」と改題して著書『村の保育所』(前掲)へ収録している¹²⁾。そうした記録の冒頭で、川崎は、そこを訪れることとなった経緯について、次のように述べていた。

「村の子供との生活は、私の今日までの童話作家としての短くない歩みの中で、幾度となく過して来たものではあつたが、農繁保育所といふやうな一定の施設の中で、保護され世話をされてゐる子供については、全く私には経験が無かつた。子供が一人である場合や、極く親しい近所の子供たちだけでゐる場合と違つて、斯うした一定の施設の中でいつしよに生活する時は、子供の個性の現はれ方、子供の動作や感情の動きもいろいろに違ふであらう。殊にそれが学齢前の幼児であり、日頃何等集団的訓練も受けてゐない子供たちの事だから、いつたいどんな風な生活形態をとるのか一向に見当がつかなかつた。是非一度勉強に行きたいと思つてゐたところへ、たまたま長谷川時雨氏のところから送つて来た『輝く』の第三年第七号に、秋田県旭村の鈴木暢子といふ人が、農繁保育所の記事を書いてゐた。私はそれを読んで、筆者の幼児に対する実に真剣な態度に激しく動かされた。早速手紙を出していろいろ様子をきいてみたところが、幸ひ向ふでも私のことをよく知つてゐたので、前年度の経験について詳しい便りをいたゞく事が出来た。〔中略〕／かうして、私は旭村に於ける農繁保育所の輪郭をおぼろげながら掴むことが出来た。前年度の子供の記念写真をじつと見つめてゐた私は、何だかその子供たちが、私に会い来いといつて呼びかけてゐるやうな気さへしてならなかつた。当事者も熱心な人だし、子供の数も、学齢児童を加へて五十人内外なら勉強には丁度良いし、若し私のやうな者でも邪魔でなければ、さうした仕事の中で、童話作家として極く極く基礎的なものを学びたいと思つて、お手伝をさせてもらへまいかと思ひ切つて言つてみた。ところが幸ひなことに、折返し是非来てほし

いといふ返事なので、早速私は準備にとりかゝつた。幾度も打合せの手紙を往復させながら、農村の子供に向く紙芝居を探すやら、レコードや絵本や童話の本を集めるやら、手工用具、折紙、クレヨン、画用紙、鉛筆、ノート、原稿紙等を揃へるために、丸々一週間は、デパートや玩具屋や文房具店や友人達の家をかけまはつた。／〔中略〕／かうして、一童話作家である私の、農繁保育所に於ける生活がはじめられた。」¹³⁾

農繁期託児所「子供の家」の実践へと参加した川崎は、童話作家としての資質を生かし、口演童話や紙芝居、蓄音機などによる児童文化活動をしながら、子どもたちや農村の人々とともに10日間を過ごした。その成果について、彼は、次のようにまとめている。

「私のこの保育所に於ける関係は、ほんのお手伝ひである。そして私自身は保姆さんではなくて童話作家である。童話作家がかういふ仕事の中に参加するといふ事は、外国では行はれてゐることであるが日本では稀れである。殆どさういふ事は無いのではないかとさへも思はれる。作家的立場から、いろいろかういふ仕事に対処する適当な方法もあるのであらう。私は今後それを見つけ出したいと思ふ。私達童話作家は、自分の生きてゐる時代の子供たちから、彼等の心の糧として、常に新しい文学を要求されてゐる。といふのは、この非常時局の中で健康に成長していくために、子供が客観的に、それらのものを必要としてゐるからである。／私が農繁保育所で暮らしてみたいと考へたのも、さういふ児童の必要に対して、何とかして答へたいといふ、止むに止まれぬ心からなのであつた。一度や二度の努力でそれが文学になるとは思はない。文学はそんな簡単なものではない。今後も私は出来るだけ機会を作つて、かういふ仕事の中に参加させて貰つて、しつかり勉強したいと思つてゐる。今度行つたら、どんな記録が書けるだらうとそんなことも楽しみである。」¹⁴⁾

そのように述べていた川崎は、1938(昭和13)年6月1日から5日までの5日間(養蚕時期)、25日から28日の4日間(田植え時期)という2度に分けて埼玉県南埼玉郡日勝村を訪れてゐる¹⁵⁾。日勝村は「恩賜財団(ママ)法人愛育会直属の所謂愛育村として全国でも代表的なところ」であり、今回の参加は、愛育会とも関係が深い「保問研」による農繁期託児所研究の一環で行われたため、前半2日目には研究会の写真班や応援団が訪問して児童文化実践・調査活動もなされた¹⁶⁾。彼は、前半5日間における成果として、次のような事項をあげている。

「期間が短かつた事は、だいぶ様子もわかつて来て、さあこれからといふ所で終りになるので参加者としては物足りなかつた。また児童の生活や心の問題にまで深くふれることの出来なかつた事は、耐へ難い淋しさであつた。童話作家としての立場からは、今度の生

活は大体に於て失敗といへる。たゞ遊戯・お話・紙芝居・人形芝居などを子供と共に楽しんだことによつて、今日児童芸術運動の中で最も至難な問題とされてゐる、芸術の新らしい健康な内容を、どうして児童の興味の上に発展させるかといふ問題については、いくらかその解決への糸口を見つけることが出来た。又いままで観念的に掴んでゐた集団保育に関する知識を、この生活の中で否応なしに技術として持つことの出来たこと、及び、幼児の生活調査の新らしい方法を生み出すことが出来たのは思はぬ収穫であつた。」¹⁷⁾

ここでも述べられているように、「保問研」会員となつて以降の川崎は、児童文化財のあり方について、集団保育に関する知識の技術化や生活調査の具体的方法の観点から見なおしを図ることができたのだという。すなわち、「生活調査や生活訓練を新しく遊戯の中にとり入れた『手洗ひ競争』〔、〕『鼻かみくらべ』、『オビシメアソビ』、『エンピツトリ(数観念の調査)』等を試みた」りするなどの積極的な関わりを通して、農村の子どもに求められる保育内容への理解を深めたのである¹⁸⁾。そうした実践研究からの学びについて、彼は、「幼児教育に関する一流の学者と、保育技術者との温い協力研究機関である『保育問題研究会』の諸成果は、私の勉強に非常に役立つてくれた」と述べている¹⁹⁾。

また、「保問研」の月例会「農繁期託児所の研究」(6月23日開催)を経た後半では、3つの保育方針を立てて参加した。その方針は、次のようなものである²⁰⁾。

- | |
|--|
| <p>一、先生方に幼児保育の技術家になつていたゞくやうに努力すること。</p> <p>一、受託児童に、短い間でも出来さうな、生活訓練の目標を立て、それを土台として保育案を立てること。</p> <p>一、子守りに来てゐる小学生を、幼児の指導者として訓練すること。</p> |
|--|

月例会において検討された「村の役人中心では駄目で、村人が自発的に協力する様にしたい」や「子供の技能知能についてみると、充分に教育の必要を感じずる」などの問題点が、農繁期託児所での生活を担う保育者・子どもたちに求めるべき課題として、ここに早速生かされてゐることがわかる²¹⁾。そして、そうした方針に基づいて行われた保育では、「葉ツパの日」という形で手工・観察・遊戯を総合的に取り入れた活動が行われたり、子ども同士が協力して集団手工「川」に取り組んだりするなど、川崎らによって、その内容の向上が積極的に図られた。その成果について、彼は、次のようにまとめている。

「この保育所は、四日間といふ大さう短い期間でしたが、その間に子供たちは、(1)返事が上手になり、(2)同じ大字(オホアザ)の子供たちと仲好しになり、(3)学校の先生方の顔を覚え、(4)徒らに恥し

がらなくなり、(5) 集団生活にも慣れ、(6) いろいろなおけいこも覚えました。一方この仕事を通して、先生方の一通りでないお骨折りは、両親たちに農繁保育所の意義を、一層深く知って貰ふことが出来ました。私としては、(1) 保育の問題、(2) 児童の生活の問題、(3) 児童芸術の問題、(4) 就中農繁保育所に関する、『学問と実際の統一の問題』などについて、いろいろと大きなお土産をこの仕事の中から得ることが出来ました。」²²⁾

翌1939(昭和14)年、川崎大治は、田植え時期である6月25日から7月4日までの10日間にわたって開設された埼玉県大里郡長井村の農繁期託児所へと参加している²³⁾。長井村では寺院個人経営の託児所が村内の字別7カ所に設けられており、川崎は、「今度この村へ入つて、一番先に感心した事は、七つの保育所の経営者及び役場と学校とが、実によく協力してゐる事」であり、そのような「共同精神の上に立つてゐるといふこと」同時に、字別であるといふその形態は、たしかに今日の農繁保育所としては、一つの理想的な姿である」と評価した²⁴⁾。そうした字別の設置という経営方法・形態によって、子どもの出席率は高く、親しみを持って通ってくるし、親の余計な心配事もほとんど見られないため、「保問研」が問題にしてきた点はほぼ解決されているという。

しかし、「この保育所での保育プラン及びその具体的内容は、我々の研究会の今日までの成果を、大体に於いて用ひる事が出来た」とはいえ、「かういふ保育所の事は、幼稚園の保育技術そのまゝでは駄目だし、小学校の技術だけでも間に合はぬ」と言う意味からすれば、その「両者のよいところを、農村の子供の特殊な生活を土台として生かすと同時に、又、今日の日本に於ける農繁保育所、といふ新しい立場からの独特の保育方法を、もつともつと産み出す事の必要をしみじみと感じた」との感想を寄せている²⁵⁾。また、彼は、今後の具体的課題として、多様な年齢を受け入れるに当たっての組分け、組織的な指導法の開発、教育・保健面の向上による乳児の受け入れ、母親の再教育などの点も指摘した。

Ⅲ 川崎大治による3冊の農繁期託児所論

(1) 『季節保育所の経営及び其の実際』(1940年)

川崎大治によれば、そのような「季節保育所に於ける毎年の私の生活は、大切な年中行事となつてしまつた」のだという²⁶⁾。そうした経験は、1939年以降、童話・紙芝居の取材・創作、各地における講演・講習会の講師、農繁期託児所に関する著書の執筆へとつながった。

講演・講習会については、向川幹雄作成の「年譜」によれば、「埼玉県の騎西町及〔び〕桶川町で開かれた農繁期託児所保母養成講習会で保育の実際につき講演」(1939年3月)、「保母養成所講師として埼玉県の羽生、熊谷、本庄等の地方で講演」(同年5月)、「軍事保護院

及び恩賜財団愛育会によって開かれた戦役遺族のための保母養成所に講師として招かれる」(1940年3月)、「京都東本願寺で開かれた保育講習会に講師として行く」(1943年3月)などの記載が見られる²⁷⁾。川崎は、これらの経験について、「埼玉県庁及び神奈川県庁から、保育所指導の講師として招聘され、数回に亘り、県下を殆ど隅なく巡回し、千人を超える実際家との経験をとりかはし得たことも大きな勉強であつた」し、「季節保育所の中での遺族の方々との協同の研究は、皇国の将来をつぐ聖なるふたばの護りに、この身もまた共にあることの喜びを深く感じさせられた」と述べている²⁸⁾。その他、「昭和十六年八月、日本放送協会の求めに応じて、神奈川県高部屋村に保育所の実況を詳細に録音し、これを全国放送することを得た」り、自作の紙芝居を携えての地方訪問もかなりなされたりしているため、川崎による指導は幅広く行われたものと推測される²⁹⁾。

また、そうした講師活動の傍ら、彼は、『季節保育所の経営及び其の実際』(前掲)や『村の保育所』(前掲)、『戦時保育所——保母と挺身隊への手引』(前掲)も相次いで著していく。これらは、戦時下における彼の保育観・保育思想を裏づける重要な著作であった。

まず、「産業組合中央会」の求めに応じて著した『季節保育所の経営及び其の実際』(前掲)である(本書は、1946(昭和21)年、同題のまま改訂が施され、全国農業会厚生部による編集(農村厚生叢書)の形で藤書房から復刊されている)。「産業組合法」(1900(明治33)年公布)に基づいて、1905(明治38)年に設立された「大日本産業組合中央会」が改組し、1910(明治43)年に発足した「産業組合中央会」は、雑誌『家の光』(1925(大正14)年5月創刊)を発行するなど、農山漁村経済更生運動の担い手として幅広い活動を展開しており、その1つに農繁期託児所開設の奨励事業があった。

本書は、口絵写真1ページ、「例言」や「執筆者の言葉」、目次・奥付を除いた本文が全141ページからなる小冊子で、「経営と保育の実際に就て多年此の方面の研究者であり指導者である川崎大治氏を煩はし其の執筆に係るものである」と、「例言」には記されている³⁰⁾。また、「執筆者の言葉」によれば、「此の書の特徴は、今日季の節保育所経営の中で、一番難かしいと謂はれてゐる保育の問題を中心に、出来るだけ理想論や、抽象論をやめて、実際の事を多く盛らうと努めた所にある」という³¹⁾。本書について、『保育問題研究』誌の記事では、浦辺史・阿部和子が共著でまとめた中央社会事業協会社会事業研究所編『季節共同保育所』(中央社会事業協会社会事業研究所、1940年)とともに、「会員の労作二つ」として、「両書とも会の研究成果が十分に汲みとられてゐる」と紹介された³²⁾。

全体の構成については、「季節保育所の意義」にはじまり、施設・設備・備品、経費や運営手順が具体的に述

べられる一方、童話作家である川崎自身の経験が積極的に生かされ、お話や自然物・折り紙などの遊具を用いた遊びの指導にもかなり詳しく触れられている。それは、「季節保育所の中で、大勢の子供たちが一緒になつて一つの遊びをすることは、子供たちの喜びを高める上にも、又、集団性や行動性を養ふ上にも、大変重要なことである」との認識によるものであった³³⁾。また、「すべて幼児の訓練は、単なる抽象的なお説教ではなく、面白い遊びの中で、きちんとすること、綺麗にすることの喜びを『諒解』させることが大事である」とも述べており、「子供たちによい習慣をつけ、協和の精神を養ふ」ものとして、遊びは位置づけられている³⁴⁾。

そうした遊びのうちでも詳しく紹介されているものが、「石ころの使ひ方」や「草・草花及び木の葉の使ひ方」、「土の利用」といった「自然物利用の保育」である。川崎は、「何か特別に幼児の教育といへば、幼稚園の真似事をする事ばかりのやうに考へる」場合が多く、「季節保育所の保育方法の中で、一番特色のあるものは、自然物利用の方法である」との点が忘れられがちになっているのだと指摘する³⁵⁾。確かに経費は乏しく、「遊具、保育教具などが充分でない」ものの、「都会の幼稚園には得られない自然的教材を、充分生かして使ふならば、又他の場所では到底行ひ得ない面白さが生まれる」のであって、「こゝに季節保育所に於ける特別な方法がある」というのである³⁶⁾。

一方、「保問研」で研究課題とされた「生活訓練（社会的訓練）」について、農繁期託児所の本質や目的を踏まえつつ、「社会生活」及び「教育」、「衛生」を軸に概説している点も本書の特徴であると言えよう。「保育所は子供を預かるだけでなく、たとへ短い期間とはいへ、その間に一定の保育の目標を立て、子供を取扱ふやうにしたい」とし、「乳児に対しては、特に保健上の注意が大切であり、幼児に対しては、社会性の陶冶といふ事が課題になる」との立場から³⁷⁾、川崎は、次のような「具体的目標」を示している³⁸⁾。

- 一、社会生活
 - イ、先生と友達への朝と帰りの挨拶
 - ロ、名前を呼ばれたら返事をする
 - ハ、自分の名前をはつきり言ふ
- 二、合図を知つて集合する
- ホ、二列行進
- 二、教育（年長幼児）
 - イ、名前を書く
 - ロ、十まで数へる
- 三、衛生（詳しくは次の章〔省略〕を参照）
 - イ、手を洗ふ
 - ロ、爪を切る
 - ハ、はなをかむ
 - ニ、用便

なぜ、彼は、農繁期託児所でも、こうした「生活訓練（社会的訓練）」を行うべきだというのか。その理由については、次のように述べている。

「それは、幼児も亦単なる自由放任の考で扱はれるのではなく、幼ければ幼いなりに、自分の生活を身に応じた方法で、処理して行く事が大切であるからである。身勝手な行ひなども、小学校へ入つてから急に無くしやうとしても、なかなか無理なことである。やはり幼い者は幼い者として、日常の生活の中で、充分訓練されることが必要なのである。殊に今後の日本が、国家的に必要とする有為な人物を育成するといふ立場から見るときは、健康な肉体と共に、協同的精神の発達といふことは、幼い折からこれを必要とするのであり、寧ろ幼い折にこそ、大切な国民的基礎が作られると言ふべきである。」³⁹⁾

さらに、川崎は、他の「保問研」会員と同様に、農繁期託児所の開設や運営において、「部落の人の関心と協同意識の如何に依る」ところが大きい点も指摘をしている⁴⁰⁾。しかし、その具体的方策については、中央社会事業協会社会事業研究所編『季節共同保育所』（前掲）と比較して、非常に簡潔なものとなっており、前述したような遊びの具体的指導方法に本書の重点が置かれている感は否めない。また、「保姆には誰がなるか」という章が設けられてはいるけれど、根岸マツエ（草笛）も指摘するように、保姆の資質や養成方法に関する記述は表面的で平板なものとなっており、保育専門職の経歴を持たないことなどによる限界が見られた⁴¹⁾。

(2) 『村の保育所』（1942年）

次に、『村の保育所』（前掲）である。本書は、口絵写真2ページと「はしがき」、目次・奥付を除いて、本文が全339ページからなる。

川崎大治は、「はしがき」において、「この書の一番大きな目的は、農繁期に開かれる保育所といふものが、どんなものであるかといふことを、できるだけ大勢の人たちに知つてもらふこと」であり、「そのために文章もやさしく出来るだけ理論はぬきにして、具体的に親しみ易く書くことを特に心がけた」と述べる⁴²⁾。そうした本書は、前著『季節保育所の経営及び其の実際』（前掲）と異なり、これまで各誌に発表してきた「保育日記を一番の土台」として据え、「保育所を通じて、日本の農村の生きた姿をかく」こと、すなわち「保姆さんの新しい健康な姿、人間として日本人として、この時代を背負つて立つ保育者の姿、その方々が子供を愛し生活を愛し国を愛するその実践の姿、苦勞をのり越えての大きな喜び、それらのことをありのままに書きたい」との姿勢でまとめられた⁴³⁾。

まず、「開所式まで」及び「保育所の一日」という最初の2章は、前著で示されていた開設・運営・生活の流れを詳細に追うものとなっている。それは、概説に徹

した前著とは全く異なり、童話作家である川崎の本領を發揮し、「開所式まで」の章では物語風の、「保育所の一日」の章においては日誌風の記述方法が取られており、類書には見られない特徴を備えた部分である。ただし、両章の文中には年号（6月14日（第3日目）・29日（第8日目）という記述だけはある）や具体的地名などが記されておらず、いつ・どこでの実践を取りまとめたものなのかは特定できない。そうした意味では、自身が重ねてきた経験を再構成した準創作的なものだという可能性もある。同じく「保問研」の会員であった塩谷アイは、この2章について、「『保育所の健康な姿』と呼ぶに相応はしい、楽しく明るい雰囲気、ピチピチした子供の姿、囚はれない独創的な保育法がどの頁にも満ち溢れてゐる」し、「読む人は確かに著者の期待してゐる如く、『保育所つてこんな面白いものなのか』と感心し、『こんな風にすればうまく行くのだな』と教へられ、『自分も早くあんな風にやつてみたい』と励まされる事であらう」と述べ、「きまりきった保育指導書の幾巻を繙いても得られない無限の興味と示唆が湧いて来る」ものだと評価している⁴⁴⁾。

続く「保姆への感謝」という章は、保育担当者による手記や川崎への私信を交えながら、農繁期託児所が直面している現実的課題や改善の方向性を指し示す内容となった。具体的には、子どもを長時間にわたって保育する手立ての欠如や児童文化財・教具・設備の不足、村の子どもに見られる粗雑な態度や親の無理解などが解決すべき問題としてあげられており、彼は、次のような解決への道筋が必要なことを主張している。

「今日かうしたいろいろな困難に対して、私はたゞ、保姆さん方の一般的な技術の低さや教養や熱意の問題、たゞそれだけをとりあげて兎や角言ふことは、差し控へたい気がするのです。いやしくも立派な仕事をしてゐる人々が困難にぶつかるといふ事には、それだけの深い理由があるのです。保姆さんの問題にしても、村の問題にしても、又私達に責任のある幼児文化の問題にしても、それを今日の保姆さん方、村のあり方、国の運命、さう言つたものとの深い関聯の中で、考へることなしにはどれ一つだつて解決されないのです。ひろい心持で、原因を、社会的に、歴史的に深く見極めて、全体がよくなるやうに、解決の途を見出していきたいものです。」⁴⁵⁾

こうした形で問題解決の方途が実践的かつ社会的に探究されるべきだとする立場は、明らかに、川崎が会員の1人として参加していた「保問研」の研究姿勢を反映するものであった。そのことは、童話作家である彼が、次のように「保問研」の立場をとらえ、それを高く評価した上で、自らの仕事へ生かそうともしている点に示されているよう。

「学問は常に現場の中から、即ち、幼児の家庭や、社会や、国家との深い関聯を持つた幼児の生活を土台

とする保育者の実践を通じて、組み立てられていかなければならぬ。日本の保育学は何よりも先づ、日本の幼児が持つその複雑な独特な、日本の子供としての生活を土台として生み出されなければならぬ。私達の『保育問題研究会』は、学問と実際との暖い協力の上に、日本の未来を担ふ幼い生命が、健康に生長して行くことを約束してゐる。此の意味で『保育問題研究会』は、幼児保育の研究機関として、日本一の団体であると私は信じてゐるのである。従つて、幼児に与へる童話の創作もまた、かうした会の成果に対していさゝかでも私も役立ち、そしてその成果を正しく受け取ることなしには、全く考へられないのである。」⁴⁶⁾

「現地報告」の章における3つの実践報告は、「農繁期託児所」を「季節保育所」に改めるなど、字句に修正を加えて、既発表の原稿を収録している。「農繁期の村の子供」は、恩賜財団愛育会発行の雑誌『愛育』第4巻第9号（1938年9月号）に掲載された同題の実践報告を、続く「日勝村での成果」は、「日勝村中間報告」（『保育問題研究』保育問題研究会、第2巻第6号、1938年6月）及び「日勝村農繁期託児所報告書（其二）」（同前、第2巻第8号、1938年8月）の2編を再構成したもので、いずれも、前述した1938年6月の「保育問題研究会」による調査も兼ねて訪れた際の報告である。また、「長井村の共同経営」は、『保育問題研究』第3巻第8号（1939年8月号）に掲載された「字別に開かれた保育所——埼玉県長井村上須戸保育所を中心に」を改題して収めている。こちらも、前述した1938年6月末頃に同村を訪問した際の報告である。川崎は、それら3つの報告を本書へと収録した理由について、「両村とも現在では更に進んだ方法によつて、経営され保育されてゐるわけではありますが、全国的に見るならば、まだまだこの一文が参考になる所も少くはあるまいと存じ、敢てそのまま載せさせていたゞきました」と述べている⁴⁷⁾。

また、1941年頃から自身での制作へと着手し、その作品数を増やしつた紙芝居について、「紙芝居の魅力」という章をあえて設け、自身の実践経験を踏まえながら、農繁期託児所における「紙芝居利用の現状」や「保育技術としての多彩な活用面」が述べられている点も、本書の特徴であると言ってよい。前者の「紙芝居利用の現状」は、論文「農繁期保育所に於ける紙芝居利用の実際」（『児童保護』日本少年保護協会、第11巻第4号、1941年4月）を改題して収録したものであり、「教具」としての紙芝居利用の意義や現状が論じられている。川崎によれば、「紙芝居は、何処でゞも、誰にでも出来る」し、「而も値が安いといふこの特色は、都会に於いてよりは、農山漁村などの季節保育所の施設に於いては、必要欠くべからざる条件である」とされ、「それだけに、この施設の中に持つ紙芝居の効果は大きく、その役割はまた重大といはねばならぬ」という⁴⁸⁾。しかし、「農繁

保育所に於ける今日の紙芝居の扱われ方は、まだ一般には、教具としてよりは子供を喜ばせるための道具」、すなわち「娯楽用である」場合が非常に多く、「紙芝居の撰択こそは、実に重要な問題」だと指摘する⁴⁹⁾。そして、「若し優れたものを書くならば、それは単に子供達を喜ばせ、健康な情操を養ふだけでなく、言葉の訓練に役立ち、観察の材料ともなり、子供達を広い豊かな世界にも発展させ、彼等の生活に強靱な指導性を与へるであらう」とも提言した⁵⁰⁾。その上で、農村幼児の環境的な条件を踏まえた創作・選択の重要性、保育との有機的な関連に基づく使用法など、自らの作品や実践を交えながら、「保育技術としての多彩な活用面」も具体的に紹介している。

最後の「塚掘保育所の十日間」という章は、前述したように、川崎が「初めて農繁保育所の仕事に協力した時」のことをまとめて、『生活学校』誌に発表した旧稿を収録したものである⁵¹⁾。あえて収録した理由について、「此の記録は、保育所に於ける一童話作家の、原始的ではあるがひたむきな一片の観察記録である」し、「其後、保育技術の上で、幾多の収穫をもたらして呉れた、いくつかの経験に較べて、かへつて保育所の特色ある姿を、また別の面から窺ひうるのではないかとも思われるので、敢て其当時の記録をそのままそつくり御紹介する次第である」と述べている⁵²⁾。

このように、本書は、川崎自身の実践記録をもとに全体が構成され、農繁期託児所の様子を具体的に紹介するものとなった。しかし、それは、塩谷アイによれば、「著者が童話作家として外部からの協力者の形で」参加しただけであった点に着目すれば、次のように、極めて一面的な内容になってしまっているのだという⁵³⁾。

「農村の保育の問題は一般の世の人々が、その仕事を理解する事、現在及びこれから特に多くなるであらう村外からの勤労奉仕的な働き手（婦人会員、女子青年〔〕女子学生等）が集まつて来た村の子供達を興味をもつて終日楽しく遊ばせる事、唯それだけでは十分に解決出来るものではないであらう。そこには、…責任をもつた保姆が、村全体との関係に於て保育所の仕事を経営してゆく為の、充分な条件が具はる事が必要である。これを思ふ時、本書は、あまりにも一方のみ目指して書かれた不満を感じないわけには行かない。」⁵⁴⁾

根岸草笛『鐘——農村保姆の記録』（山雅房、1942年）を同じ書評の中で取りあげていた塩谷は、「村の保育問題の解決のためには『鐘』の著者が内部からの醸成に努力を傾けてゐるのに呼応して『村の保育所』の著者は、その専門分野である、童話、紙芝居等の文化財の整備をもつて外から之に力を藉す役割を受持たれる事こそ重要であり有効ではないだらうか」、「勿論、この両面からの仕事は截然と区別すべきものではなく、両々相俟つて日本の保育施設の進展のために欠く事の出来ないものであ

るが一応の限界のあることも亦当然であらう」とも評している⁵⁵⁾。川崎による実践及び著書の内容は、農村保育の基盤づくりなどの問題が捨象されているという点では一定の限界を持つものであった。

(3) 『戦時保育所 —— 保姆と挺身隊への手引』

(1945年)

続いて、『戦時保育所』（前掲）である。本書は、口絵写真4ページと「緒言」、「はじめに」、目次、奥付を除いて、本文（「あとがき」を含む）が全270ページからなり、「大東亜戦争の完遂を祈念し／保育所に働く日本女性に捧ぐ／著者」の献辞を掲げ、「社団法人農山漁村文化協会」による監修で学習社から出版されている（復刻版として、中野邦監修『女と戦争——近代女性文献資料叢書（第23巻）』（大空社、1992年）もある）。同協会は、1940（昭和15）年に有馬頼寧を会長として発足した文化組織であり、当時、農村人形劇の脚本や紙芝居の編輯・出版などを手がけていた。

本書執筆の目的について、川崎大治は、「ふだんから村にをられる方方や、また、保育所へ挺身隊員として出かけられる町の方々が、農繁期に開かれる季節保育所の中で保育が出来て、お国のお役にたつやうに、また、子供達も喜び、働かれる方もそこで良い勉強が出来るやうに、さういふことを願つて書いた手引書です」と記している⁵⁶⁾。その内容は、「何よりも決戦下の保育所で実際に使へるもの、即ち、全国各地の保育所に共通する根本の大きな特徴をつかまへて、さういふ村の保育所独自の保育の仕方はどうすればよいかといふこと、それをいろいろに研究し、工夫し、いづれも実地にやつてみた、これこそ思はれる大事なもののだけをとりあげました」とされた⁵⁷⁾。

全体の構成は、総論となる第1章「決戦下の季節保育所」にはじまり、開設準備・運営・後始末の流れをたどった各論として第2章「保育への準備」から第15章「閉所後の仕事」までが置かれている。こうした構成は、旧著『季節保育所の経営及び其の実際』（前掲）の内容を踏まえ、それを大幅に増補・改訂したものだと思ふことができるであろう。

しかし、本書は、太平洋戦争末期に当たる1945年1月の発行であるため、書名自体が示しているように、以前から述べられていた「増産」や「銃後の支援」などの文言に加えて、「皇民の錬成」や保姆の「行（減私奉公の働き）」といった事柄も強く主張するものになっている。旧著においては、農繁期託児所の役割として、「現在、聖戦遂行のときにあたつて、男子は御国のために出征し、留守を護る母や姉が代つて戦時増産計画を担つてゐる農村では、子供の守をするものは誰もゐないのであるから、従つて、此の施設は、軍事援護の意味から言つても極めて深い意義をもつてゐるのである」と述べる程度にあったものが、ここへ来て「戦争」目的を前面に押

し出すこととなったのである⁵⁸⁾。

川崎大治は、本書の「はじめに」において、「戦時保育所は、いままでとはくらべものにならぬほど重要になつてまゐりました」し、「この保育所の中での働きもまた、大東亜戦争そのものの運命を担つてゐるのです」と、かなり抑え気味に述べている⁵⁹⁾。ところが、本文では、「戦時保育所」としての役割や保姆たる者（女子挺身隊）の心得、「錬成」の事例などが本格的に語られることとなる。とりわけ第1章「決戦下の季節保育所」においては、そのような主張が目立つ。例えば、川崎は、今や「戦時季節保育所」となった農繁期託児所の意義について、次のように述べている。

「はじめは『お子さま預り所』、或は『農繁託児所』と呼ばれ、それが農家の生産に役だつてゐたが、次第に村全体のためにといふことになり、更にそれが今日では、国のため、聖戦完遂のためにといふところまで、成長して来たのである。そしてここへ来てはじめて、ほんたうに、村や農家のためにも役だつ施設となり、皇国民としての幼児を保育するといふ意味で、農繁季節保育所といはれ、いまでは一般に戦時季節保育所と呼ばれてゐる。」⁶⁰⁾

いわば、「今日の保育所の新しい積極的な意義」としては、「増産といふ物の方面からいつても、幼い皇民の錬成といふ人の方面からいつても、更に今日、前線勇士及び増産戦士に、安心していただき、その士気を鼓舞するといふ方面からいつても、大東亜戦争を真に勝ち抜くための一番基礎的な仕事が、この保育所の仕事であるともいへる」というのである⁶¹⁾。また、かつての「生活訓練（社会的訓練）」論も、「今日の季節保育所のもつ使命といふもの、子供に対し、家庭や村に対し、国家に対してもつその使命といふものを、しつかり身につけてゐること」、「即ち、子供に対しては、あくまで皇国民としての錬成、幼い者は幼い者としての立場から、懇切に鍛へ育てていくこと」を求める主張へと変貌してしまつた⁶²⁾。そのことを具体的に述べるため、第8章「幼児の生活錬成」が新たに置かれ、「健康な肉体とともに、皇国精神の発揚といふことは、幼いをりからこれを必要とするのであり、むしろ幼いをりにこそ、大切な皇国民としての土台が作られるのである」として、基本的生活習慣や生活規律とともに、時局に沿つた「集団行動の訓練」及び「国旗への帰一」などを求めているところも、本書に見られた大きな変化である⁶³⁾。

一方、運営方法などに関する記述は、旧著の内容を大幅に増補・改訂し、初心者にもわかるように、より具体的かつ詳細に説いている。特に、第9章「自然物の保育」や第10章「遊び百態」、第11章「折紙遊び」といった遊びの具体的な指導法に関して、全270ページの本文の中で、およそ100ページもの紙幅を費やして解説がなされている点は、本書の特徴であると言ってもよい。

なお、川崎大治は、農繁期託児所について、3冊の

著書をまとめる一方で、それに取材した童話・絵本もいくつ執筆していた。向川幹雄作成の「年譜」によれば、その作品としては、童話「太陽をかこむ子供たち」（『日本の子供——小学課外読物』文昭社、第1巻号数不明、1939年6月—8月）、同編を収録した童話集『太陽をかこむ子供たち』（文昭社、1940年）、読み物「村の保育所めぐり」（『少女の友』實業之日本社、第37巻第6号、1944年6月）、松山文雄が画を担当した絵本『ムラノホイクシヨ』（国民図書刊行会、1944年）をあげることができる。

おわりに

以上、本稿では、川崎大治による農繁期託児所の実践・研究を取りあげ、戦時下における彼の保育観・保育思想をたどつてみた。最後に、その歴史的特質を整理すれば、次の3点にまとめることができるであろう。

第1に、農繁期託児所という保育の現場において子どもの感情をつかみ、その現実生活に根ざしつつ、自らが創作する童話・紙芝居などの児童文化財や子ども自身の文化活動である遊びの質的向上を図ることで、そこに農村の文化的基盤を築いていこうとした点である。川崎は、自身の創作をプロレタリア童謡から生活主義童話へと移す過程において、子どもの明るさや行動力に強い期待を寄せ、無産者託児所や子ども会の活動にも深く関わっていた。そうした活動の延長線上にある農繁期託児所での実践は、子どもの文化に携わる者として、「農村の生活や厚生活動に深く根を下ろした、真に国民的な経営、保育の具体的な道を創造し建設して行かなければならない」との意識から、農村の文化的環境の貧しさをいかに改善し、その質を高めるかを問うものであったと言える⁶⁴⁾。類書で「今まで言はれた事の多くは一般的な基準であり、理論的な提唱であり、又実況のスナツツ描写で終つてゐた」という状況にあったことからすれば、彼の著書に盛り込まれた膨大な遊びの解説や紙芝居の活用法は、自らの実践経験を踏まえつつ、農村の子どもたちにとって文化的活動が果たすべき役割を指摘し、それらによる生活改善の具体的方策を示すものであったと見なくてはなるまい⁶⁵⁾。

第2に、子どもたちによる「集団生活」を農繁期託児所での保育・教育の基本とすることで、そこに農村の合理化や生活の共同化へと発展していく運動的な契機を見出していった点である。川崎は、「保育問題研究会」での活動を通じて、子どもの「生活訓練（社会的訓練）」の意義や実践方法を学んでおり、毎日の保育主題を検討し、集団生活に基づいた保育案を立てようという彼の取り組みは、研究会の成果を生かすものであった。また、幼児に集団生活の中で規律や協力の必要性を習得させる一方、学童に託児所の開設・運営と関わる手伝いを求めていたことも、将来の大人である子ども同士の連帯感を

強め、「協同（共同）」の意識を涵養していくための重要な教育としてとらえられていた。童話「太陽をかこむ子供たち」でも描かれたように、大人だけでなく、「村の子供が、自分たちの弟や妹を預る……保育所の仕事に、自分の働きをもつて参加したといふその事は、大きな教育的意義を持つのである」との姿勢は、そうした全村的な実践の土台づくりを企図したものであったと言えよう⁶⁶。そのような方向をめざすための保育・教育が企図される場だからこそ、川崎は、農繁期託児所ではなく「季節保育所」と呼ぶようになっていった。

第3に、前述したような社会改善を進めるため、「増産」や「児童愛護」などを積極的に謳い、「生産力理論」としての立場から託児所の意義を主張していった点である。戦時体制下に数多く作られた農繁期託児所は、子どもが保育を受ける機会の拡大につながった反面、食糧増産や少国民錬成の基礎を支える施設として、「戦争協力」を担うものともなっており、その性格には相矛盾する側面があった。川崎大治は、子どもに対する自らの実践的な立場として、英米への宣戦布告が「世界無比の国体を持つ我国にして初めて宣揚し得る人類最高の倫理性の表現」であり、「少国民を対象とする我々の実践もまた、大東亜戦争の偉大な理想を完遂するための、最も基礎的な一翼に他ならない」と、「戦争協力」を明らかに謳っている⁶⁷。また、前述したように、「戦時保育所は、いままでとはくらべものにならぬほど重要になつてまゐりました」し、「この保育所の中での働きもまた、大東亜戦争そのものの運命を担つてゐるのです」とも述べ、『戦時保育所』（前掲）の書名が象徴するように、「決戦下の季節保育所」の意義を主張することにもなっていた⁶⁸。

上笙一郎・山崎朋子は、そうした変化に着目し、「川崎の個人的または生活的な条件をぬき去って、第三者の立場から客観的にながめれば、……川崎の歩みは、結果的には、日本軍国主義への協力につながっていたと言わなくてはなりません」と述べ、童話作家の「川崎が農村保育所の指導者になったということは、とりもなおさず、侵略戦争の遂行に協力することにほかならなかつた」と厳しく批判している⁶⁹。しかし、上・山崎は、その一方で彼の取り組みの裏側にあった良心的な部分もとらえており、「骨の髄からの軍国主義者よりは、軍国主義の正体を知っている川崎のような人物が保育の指導者となったことのほうが、どれほど、農村の子どもたちの真のしあわせのためであったことか」、「つまり、ほかのことはひとまず措いていのですが、事、保育の問題に関しては、何も仕事をしなかつた人よりも、川崎のように、できるかぎり農民の立場に立とうとつとめて仕事をした人のほうが、むしろ、軍国主義の抵抗をしたと言わなくてはならないのです」と、実践的には、「協力」及び「抵抗」という相矛盾する立場にあったことを指摘する⁷⁰。

そうした相矛盾するような保育実践への取り組みや研

究姿勢は、「保問研」会員に共通して見られるものであった。川崎とともに「保問研」の活動へと参加し、独自の児童文学・児童文化論を展開した菅忠道は、戦後、童話「太陽をかこむ子供たち」に触れて、次のような思想面での弱さを指摘している。

「川崎大治の『太陽をかこむ子供たち』（日本の子供）昭和十四年）は、生産力理論に照応する児童文学として代表的なものであろう。農繁期託児所に協力する農村の子どもたちを描き、時局色のなかにも、農村合理化や生活集団化の発展の芽をとらえていた。かれも保育問題研究会の活動家として、一つの考えにつながっていた。しかし、国策への同調という突破口を、自らのなかにつくっていたわけである。」⁷¹

国の生産力向上が社会システムを合理的に改革し得るのだとする「生産力理論」は、戦時下の抵抗的教育運動において思想的なよりどころであったとされる。「保問研」やその姉妹団体である「教育科学研究会」では、会長の城戸幡太郎が中心となって、「生産力理論」の立場から教育の観念性を批判し、科学性・合理性による現状分析を基軸としながら、制度的・政策的な拡充を企図する運動が試みられていた⁷²。しかし、その立場は、結局のところ「戦争協力」を謳うものには変わりはなく、戦時体制の強化に「抵抗」する最終的なすべを持っていないことが露呈してしまう。そうした研究会の性格は、菅が指摘するように、農繁期託児所の実践・研究へと積極的に関わった川崎も全く無縁のものではなく、結果的として、「戦争協力」の姿勢を全面に押し出す形となっていたのである。

〔注〕

- 1) 向川幹雄「川崎大治」（大阪国際児童文学館編『日本児童文学事典（第1巻）』大日本図書、1993年）。
- 2) 川崎大治『村の保育所』東京講演会出版部、1942年、p.3 はしがき。
- 3) 「保育問題研究会」の農繁期託児所研究については、松本園子「戦前の保育問題研究会の思想と実践（三）——戦時下農繁期託児所問題をめぐって」（『淑徳短期大学研究紀要』第19号、1980年、後に加筆・修正され、同『昭和戦中期の保育問題研究会——保育者と研究者の共同の軌跡（1936-1943）』（新読書社、2003年）へと収録された）、拙稿「戦時下保育運動における農繁期託児所研究——『保育問題研究会』を中心に」（『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』第8号、2007年3月）を参照のこと。
- 4) 農村における臨時的な保育事業については、当時、農繁期保育所や季節託児所、季節保育所などの呼称が混在して用いられていた。また、「季節保育所」と呼ばれる場合には、農業のみならず他業種の繁忙期に開設する保育事業も含んでの使用も散見される。本稿においては、各初出誌における川崎大治の表記、「保問

- 研」における研究活動の状況を踏まえつつ、引用などを除いて、一応、「農繁期託児所」で統一する。
- 5) 古木弘造『幼児保育史』巖松堂書店、1949年、p.128。
 - 6) 川崎大治の歩みについては、向川幹雄「川崎大治解説」(『日本児童文学大系 30 槇本楠郎・猪野省三・川崎大治・岡本良雄・下畑卓・関英雄』ほるぷ出版1978年)、同編「川崎大治年譜」(同前)、〔無署名〕「川崎大治の歩んだ道——川崎大治年譜」(『子どもの文化』財団法人文民教育協会・子どもの文化協会、第12巻第9号、1980年10月)、向川幹雄編「川崎大治略年譜」(『日本児童文学』偕成社、第310号、1980年12月)、向川「川崎大治」(前掲)などを参照のこと。
 - 7) 拙稿「戦時下保育運動における『幼児文化』研究——『保育問題研究会』第五部会と第六部会を中心に」(『児童文学論叢』日本児童文学学会中部支部、第10号、2004年12月)。
 - 8) 〔無署名〕「紙芝居制作41年——紙芝居作品目録」(『子どもの文化』第12巻第9号)。
 - 9) 向川「川崎大治解説」(前掲、p.541)。
 - 10) 同上。
 - 11) 川崎『村の保育所』(前掲、p.1 はしがき)。
 - 12) 川崎大治「農繁期託児所の十日間——童話作家による幼児生活の観察記録」(『生活学校』扶桑閣、第4巻第4号、1938年4月、第4巻第5号、同年5月)。なお、川崎と秋田県平鹿郡旭村の農繁期託児所「子供の家」の関わりについては、上笙一郎・山崎朋子「暗い谷間の農村保育——川崎大治と秋田県旭村農繁保育所」(同『日本の幼稚園——幼児教育の歴史』理論社、1965年)が詳しい。なお、同書には、光文社文庫版(1985年)、ちくま学芸文庫版(1994年)もある。
 - 13) 川崎『村の保育所』(前掲、pp.230-241)。なお、鈴木暢子が開設した農繁期託児所「子供の家」については、宍戸健夫『日本の幼児保育——昭和保育思想史(上)』(青木書店、1988年)を参照のこと。
 - 14) 川崎『村の保育所』(前掲、pp.322-323)。
 - 15) 川崎大治「日勝村中間報告」(『保育問題研究』保育問題研究会、第2巻第6号、1938年6月)、同「日勝村農繁期託児所報告書(其二)」(同前、第2巻第8号、1938年8月)。これら2つの報告は、後述するように、「日勝村での成果」と改題し、実践記録「農繁期の村の子供」(『愛育』恩賜財団愛育会、第4巻第9号、1938年9月)と併せて、川崎『村の保育所』(前掲)に収録されている。
 - 16) 川崎『村の保育所』(前掲、p.137(傍点原文、以下同様))。
 - 17) 同上、p.142。
 - 18) 同上、pp.141-142 ([……]は引用者、以下同様)。
 - 19) 同上、p.2 はしがき。
 - 20) 同上、p.144。
 - 21) 塩谷アイ「研究会報告・月例会」(『保育問題研究』第2巻第8号、p.31)。
 - 22) 川崎『村の保育所』(前掲、pp.135-136)。
 - 23) 川崎大治「字別に開かれた保育所——埼玉県長井村上須戸保育所を中心に」(『保育問題研究』第3巻第8号、1939年8月)。この記録は、後述するように、「長井村の共同経営」と改題されて、川崎『村の保育所』(前掲)に収録されている。
 - 24) 川崎『村の保育所』(前掲、pp.152-153)。
 - 25) 同上、pp.165-166。
 - 26) 同上、p.2 はしがき。
 - 27) 向川編「川崎大治年譜」(前掲、pp.606-607)。
 - 28) 川崎『村の保育所』(前掲、pp.2-3 はしがき)。
 - 29) 同上、p.3 はしがき。
 - 30) 川崎大治『季節保育所の経営及び其の実際』産業組合中央会、1940年、p.3 例言。
 - 31) 同上、p.4 執筆者の言葉。
 - 32) 〔無署名〕「会員の労作二つ」(『保育問題研究』第4巻第4号、1940年4月、p.29)。
 - 33) 川崎『季節保育所の経営及び其の実際』(前掲、p.89)。
 - 34) 同上、pp.39-40。
 - 35) 同上、p.64。
 - 36) 同上、p.17。
 - 37) 同上、pp.34-35。
 - 38) 同上、pp.37-38。
 - 39) 同上、pp.35-36。
 - 40) 同上、p.9。
 - 41) 根岸マツエ「〔書評〕川崎大治氏『農繁期託児所の経営と其の実際』を読んで」(『社会事業』財団法人中央社会事業協会社会事業研究所、第24巻第7号、1940年7月)。
 - 42) 川崎『村の保育所』(前掲、pp.3-4 はしがき)。なお、川崎大治は、本書刊行後にも、同「ふきとり・保育所・手伝班」(『少国民文化』財団法人日本少国民文化協会、第1巻第2号、1942年7月)や同「村の保育所から」(『国民保育』日本保育館、第2巻第11号、1942年11月)などの論稿を執筆している。
 - 43) 川崎『村の保育所』(前掲、p.4 はしがき)。
 - 44) 塩谷アイ「〔新刊紹介〕根岸草笛著『鐘——農村保姆の記録』／川崎大治著『村の保育所』」(『厚生問題』財団法人中央社会事業協会社会事業研究所、第26巻第11号、1942年11月、p.70)。
 - 45) 川崎『村の保育所』(前掲、pp.105-106)。
 - 46) 同上、p.29。
 - 47) 同上、p.127。
 - 48) 同上、p.172。
 - 49) 同上、pp.177-179。
 - 50) 同上、p.180。
 - 51) 同上、p.229。
 - 52) 同上。

- 53) 塩谷「〔新刊紹介〕根岸草笛著『鐘——農村保姆の記録』／川崎大治著『村の保育所』」（前掲、p.71）。
- 54) 同上、p.70。
- 55) 同上、p.71。
- 56) 川崎大治『戦時保育所——保姆と挺身隊への手引』学習社、1945年、はじめに。
- 57) 同上。
- 58) 川崎『季節保育所の経営及び其の実際』（前掲、p.2）。
- 59) 川崎『戦時保育所』（前掲、はじめに）。
- 60) 同上、p.4。
- 61) 同上、p.5。
- 62) 同上、p.6。
- 63) 同上、p.115。
- 64) 川崎『村の保育所』（前掲、p.173）。
- 65) 塩谷「〔新刊紹介〕根岸草笛著『鐘——農村保姆の記録』／川崎大治著『村の保育所』」（前掲、p.69）。
- 66) 川崎『村の保育所』（前掲、p.17）。
- 67) 同上、pp.333-334。
- 68) 川崎『戦時保育所』（前掲、はじめに）。
- 69) 上・山崎「暗い谷間の農村保育」（前掲、p.188）。
- 70) 同上。
- 71) 菅忠道『増補改訂版・日本の児童文学 1 総論』大月書店、1966年、p.296。
- 72) 城戸幡太郎らによる「生産力理論」への傾斜は、佐藤広美『総力戦体制と教育科学——戦前教育科学研究会における「教育改革」論の研究』（大月書店、1997年）に詳しい。
- ※ 本稿は、「平成23年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C）」）（タイトル：「総力戦体制と『国民保育』——末期『保育問題研究会』による国策への〈抵抗〉と〈協力〉」、課題番号：23531090）による研究成果の一部である。